

2025年8月18日（月）

老球の細道 882号

指導を受ける選手の心構え、心意気「五つのかけ」

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

静岡県伊東市の市長が東洋大学を卒業したかどうかで問題になっている。本人は卒業したと思っていたが、実は卒業できず除籍になっていたという。このニュースを見て、私自身も大学卒業について何度か夢をみたことがある。卒業単位が取得できなくて卒業できず、またもう一年大学に通う辛い夢である。いかに大学時代さぼっていたかを反省させられる。

大学時代のバスケットボールはコーチもいなくて、すべて学生主体で民主的に行われていた。今はやりの「主体性」などは当たり前、「先輩後輩」の理不尽な上下関係なども無縁の世界であった。皆でバスケットを勉強し議論しながら練習計画を立て、地道に練習をしていた。

当時の大学バスケットはインカレの他に教育系大学が参加する「全日本教育系大学選手権大会」が開催されていた。大会で試合をする前に1日間、全国の有名な指導者を迎えて講習会が行われた。いくつかのセッションに分かれていたので、チームでグループを作りそれぞれのセッションに参加した。終了後、それぞれのセッションの内容をレポートにまとめ、大学に帰って来てから勉強会を開いて講習内容をチームで共有していた。

その中でとても有意義だった講習会は今でも克明に覚えている。日立市で開催された時（1974）の元日本体育大学・清水義明氏の「オールコートマンツーマンプレスディフェンス」（この時世界選手権でMVPを獲得した生井けい子さんがアシスタントコーチで参加し、男子大学生を呼び捨てで指導し、あごで使う姉御ぶりを発揮していた）、元浦和第一女子高校監督・青井水月氏の「サークルゾーンディフェンス」などは今でも記憶に新しい。金沢で開催された時（1975）は、1964年東京五輪で日本男子代表チームのアドバイザーコーチをした米国のピート・ニューエル氏とスチュー・インマン氏の「マンツーマンディフェンス」、元日本代表、筑波大学・笠原成元氏の「速攻」などが思い出される。

講習会の指導者は日本、米国を代表する錚々たるメンバーであったが、当時の私は地方大学チームということで、実技講習においては何かと引っ込み思案で失敗を恐れる姿勢が強かったと反省する。そのため常に他人の後からプレイすることが多く、せっかく遠くまで行って当時の最高の理論とプレイを十分に吸収することができなかったと悔やんでいる。

来月から会津協会主催の「アスリート講習会」が昨年に引き続き開催されるという。この講習会に参加するジュニア世代の皆さんには私の若き頃の反省として下記の「五つのかけ」をバトンタッチしたい。

- ①汗をかけ：手抜きをしないで全力を出して動く。コートに早く行き、準備する。
- ②恥をかけ：トップバッターでプレイする。大きな声を出す。失敗をする。
- ③頭をかけ：練習の目的、ゴール、コーチングポイントを意識せよ。質問しよう。
- ④書いて、書いて、かけ：家に帰ったら学習したことをノートにまとめよう。
- ⑤夢をえがけ：現在の実力がたとえ二流、三流でも、目指すは常に超一流。